

令和5年度 第3回記念館講座「川端龍子／スケッチに見る画家の昭和10年代」

大田区立龍子記念館 学芸員 木村 拓也

■川端龍子の制作活動

1885 (M18) 年 6月6日、和歌山市に生まれる (本名: 昇太郎)

1913 (T2) 年 渡米、帰国後に日本画家に転向

1915 (T4) 年 30歳の時、再興第2回日本美術院展に入選。その後、院展の花形として活躍

1929 (S4) 年 院展脱退した翌年、自らの美術団体青龍社を設立

1945 (S20) 年 自宅が戦災に遭ったにも関わらず、終戦2か月後に第17回青龍展を開催

1963 (S38) 年 文化勲章受章と喜寿を記念し、龍子記念館を設立

1966 (S41) 年 4月10日 80歳で逝去。青龍社も龍子の死とともに解散する

1. 連作「太平洋」、「大陸策」における龍子の挑戦

■美術団体・青龍社の設立と「会場芸術の主張」

1929年6月に青龍社設立、9月に第1回青龍展を東京府美術館で開催 (出品数わずか20点)

「明治この方所謂床の間藝術なるものとは、調子を別にして進展を続けている」

「会場藝術とは、いうまでも無く展覧会藝術であることです。展覧会で発表するの目的を以ての作品です」 「会場芸術の主張」『青龍社第三回展覧会出品目録』(1931年)



「画業—展覧会—時代—観衆」の関係強化を「会場芸術」の目的とし、青龍社の方針とした。

■「非常時」と呼ばれた時代を龍子はいかに描こうとしたのか

1931年の満州事変勃発、1937年からの日中戦争、太平洋戦争開戦まで龍子は連作に挑む
○連作「太平洋」1933~1936年 《龍巻》《波切不動》《椰子の篝火》《海洋を制するもの》

1934年に日本の委任統治領だった南洋諸島をおよそ50日かけてめぐった

「此の連作に於ては当今の太平洋問題の波瀾が、吾人の認識を通じてこの画心に如何の影響を与えつつあるかを吟味されたい」 川端龍子「出品解説」『第五回青龍展出品目録』1933年



当時、「海の生命線」として日本の重要な拠点となりつつあった南洋諸島であったが、

「その気分を感じるには南洋は余りにも泰平の楽土」であった (「南洋を描く⑨踊り」『東京朝日新聞』1935年1月11日)

→現地に赴いて実際に自らの眼で確かめることの重要性を再確認

○連作「大陸策」1937~1940年 《朝陽来^{ジンギスカン}》《源義経》《香炉峰》《花摘雲》

1937年に龍子が満州から帰京した直後、盧溝橋事件が勃発し日中戦争に発展していく。

龍子はそれから1940年まで毎年中国へと向かい連作に取り組んだ。

「向う四年間、皇紀二千六百年の秋に完成の予定を以て、満洲国の四辺に皇威振暢の印象を現地認識上に取材を求めて、毎年四部作の計画を樹てた」

「美術人としての特に今日の大きなお蔭は、日本国の隆盛——日本民族の発展です。この時世と機運に巡り合わせた事は、画人の天職としても此の上もないお蔭です」

川端龍子『第九回青龍展』1937年

1937年 満州と中国北部を三男とともに巡り、万里の長城を眺めて作品化
1938年 洋画家・鶴田吾郎と内蒙古へ行き、「義経＝ジンギスカン伝説」を描く
1939年 鶴田とともに中国中部を巡り戦闘機から廬山の眺めを大画面に表す
1940年 ノモンハン事件が前年にあったことからソ連と満州国境に赴き作品化
→当初は戦争の昂揚感が作品にも表されているが1940年に大きくイメージが変わる。

2. 龍子の連作はどのように受け入れられたか

■「彩管報国」の時代

画家が才筆をふるって国に協力することが求められた時代、龍子の作品は大衆から支持された。「此の計画は生きた歴史を画題に取り入れて、どこまで解決し得るか、そして又、それを自分の主張する会場芸術に結んでその結果を自分に問ひ、又世間に問ふ目的であった」

川端龍子「作品解説」『第八回龍子個展出品目録』1936年

「ニュース写真と競争しては絵は敵いません、結局、今後の戦争画は写実的のものではなく画家の主観的のもので行くべき」 「戦争と近代絵画（二）」『東京朝日新聞』1938年7月30日



「氏の思想はすべて今日の日本の政治や一般の風潮とよく一致している。この点、氏は大きなジャーナリストである」 宮本三郎「青龍展雑感」『みづゑ』379号、1936年9月

1940年、神武天皇が即位してから2600年を記念し、政府が紀元二千六百年奉祝美術展覧会を開催するも龍子および青龍社は不参加を表明。→徐々に統制に抵抗する姿勢を明確化した。

3. 連作の完結から太平洋戦争の終結まで

■「國に寄する」連作（1941～1944年）、連作「南方篇」（1942～1944年）

連作「大陸策」が完結した後も龍子は連作を制作し続けた。

1942年には陸軍省の派遣でマレー半島へ向う。国内の情勢を描いた「國に寄する」連作、国外の情勢を表した連作「南方篇」の制作を同時に進行した。

また、1941年に満州・新京に新京美術院が設立することになると、院長就任を受諾、第一次研究生たちを東京分校に迎え、これが「実践的な美術の『大陸策』の仕事」と語った。

1944年の「國に寄する」連作《怒る富士（駿河）》、連作「南方篇」《水雷神》においては、日中戦争時の作品にあるような昂揚感はなく、どうしようもない「怒り」が表現された。

そして、終戦間際の1945年6月には、「戦争に勝った暁にさて芸術が無いとあつては淋しいものでしょう」と自宅のアトリエを会場に展覧会を開催した。

○まとめとして

満州事変の勃発から太平洋戦争開戦にかけて、龍子は活躍の場を広げていった。それは、戦後になり、批判されもするが、大衆に向けて、時代性を作品を表現しようとする取り組みのものであって、今日も力強いメッセージを放つ作品となっている

今後の龍子記念館の予定

3月3日（日）まで開催 地域連携企画展「川端龍子の作品とともに観る大田区美術家協会の現在」

3月20日（水・祝）～6月9日（日） 名作展「大画面の奔流 川端龍子の『会場芸術』再考」

2月24日 13:30～15:00 講演会「大田区美術家協会の現在」 会場：大田文化の森 多目的室
座席にまだ余裕がございます。右の二次元コードからお申込みいただけます。

※定員に達し次第、受付終了

